

自然遊びを支える人的環境に関する研究

—自然を遊ぶということに着目して—

清水一巳[千葉敬愛短期大学]

キーワード：自然遊び、体験活動、間主観性、

1. はじめに

近年、体験活動の在り方について議論される中、平成19年の中央教育審議会の答申以降、平成25年の答申においても「体験」とは「体験を通じて何らかの学習がおこなわれることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」という捉え方がなされてきている。ここで言う体験活動の内容は、生活・文化体験活動、自然体験活動、社会体験活動の三つに分類されている。子どもの自然遊びを取り巻く環境としても、この自然体験活動の考え方の影響は大きいと考えられる。自然や人とのかかわりとして(平成25年答申)、「自然や人とのかかわりの中で命の尊さについて学ぶことができる」、「教育的視点に裏打ちされた自然や文化などに触れる幅広い体験が必要である」と述べられている。また、ここでは自然体験が豊富な大人ほど、意欲関心が高いという調査をもとに体験活動の効果とされている。

このように、近年では(自然)体験活動が政策的に推進されている一方で、「自然体験活動の実施率は学年が上がるにつれて減少しており、またほとんどの活動に関して、ここ5年間で減少傾向にある」という実態調査の結果が報告されている。

この減少しているのは、「学校の授業や行事以外」での体験活動であることも注目しておかなければならない点である。学校教育の枠組みでの体験活動の推進が、それ以外での体験活動に影響しているということが考えられないだろうか。

その為には、実証的な調査が必要とされてくるが、本報告では、学校教育の枠組みで提供される体験(何らかの学習が行われることを目的として提供される体験)と、それ以外の体験(自然で遊ぶ体験)とを分けるものがどこにあるのか検討することで、減少傾向にある自然体験活動の環境づくりの方向性を見出していくことを目的とする。

2. 社会学的研究の対象としての自然体験活動

これまで自然体験の範疇にある「野外活動」や「キャンプ活動」についての様々な実践や研究報告がなされている。原口氏(2004)や小池氏(1999)、石井氏(2014)の実践報告では、自然体験活動をとおして、「自然との関わり」や「自然の中での人との関わり」、「遊び文化の継承」といった活動の中で、子どもの主体的選択や自由性といったものの重要性を再認識している。しかし、原口氏が課題と掲げるように、参加者が限定的で活動の広がりが見られないという問題がある。

また、近年の野外活動の教育的意義についての報告をみると、小泉氏ら(2013)や池田氏(2010)のように生活域の自然の観察・体験による「自然への気づき」が必要であるとされている。

野井氏ら(2013)や平野氏ら(2002)は野外活動の生体へ及ぼす影響を明らかにしている。また、叶氏ら(2000)キャンプ活動、特に出会いのころや雪洞泊という高い不安のプログラムを通して、友人コンピテンスや状況的な効力感を培うという心理的な効果を明らかにしている。

このように野外活動の経験が参加者（子ども）に及ぼす影響は、生理的、心理的側面において、その効果が示されてきている。安波氏（2005）は、さらにキャンプ・プログラムのタイプにより、自然体験効果に違いがみられ、その中でも「アウトドア・スポーツ活動」は「他の全てのプログラムタイプよりも有意に高い効果が認められた」という。

しかし、このように野外活動を細分化し、プログラム種別の効果というものは、前述の実践報告において重視されている子どもの主体的選択や自由性の体験の次元とは異なるものであるといえる。自然という「いま、ここ」での体験を再現することの難しさがあり、自然の中での活動は、日常生活における生活活動のように、行為を分割して捉えることができないのが自然体験活動といえるのではないだろうか。それぞれの活動種別という枠組みよりも、どのように活動（自然）に関わっているのかその意味を捉える必要がある。

住田氏（2014、p.265）は、子ども社会学の研究対象としての子どもは『子ども世界』と『大人世界』という二つの領域に分けて考えることができる」として、それらを「独立変数の領域と従属変数の領域である」とみている。また、「子ども世界の中での子どもという独立変数の領域での研究はきわめて少ない」と指摘している。

本報告でとりあげる対象は、大人世界によって企画された「子どもキャンプ」というもので、その中での「自然」と関わる「子ども世界」（子どもを独立変数とした関係）と、「大人世界」における「自然」との関わり（子どもを従属変数とした関係）となる。

3. 子どもキャンプにおける自然を遊ぶというコト

子どもの自然遊びという体験がどのような意味を持つのか、自然遊びを自然体験活動として位置づけて考えていく事が可能かどうか、事例を元に検討を進めていく。ここで、矢野氏の体験と経験の捉え方が参考になると思われる。矢野氏は、「教育を『発達としての教育』と『生成としての教育』の二つの次元から成立しているものとみなす必要がある」と指摘する。この二つの次元のもとになるのが「経験」と「体験」と位置付けている。子どもキャンプという「大人世界」で企画された活動の中での「体験」の可能性について読み取る作業を行っていく。

①生き物を捕まえるということ

虫を捕まえるというコトに遊びが成立するか。

②繰り返される虫（生き物）のペット化

虫を取るというコトとは、子どもにとっては何匹捕まえたか、という量的満足感が優勢を占めている。虫が死ぬということにたいする道徳的価値観の形成について。

③暗闇を歩くということ

1) 野外紙芝居による、ファンタジーと現実のつながり

2) 冒険というファンタジーによる暗闇という現実世界への侵入

「こと」としての自然との関わりとして、「暗闇の冒険」をあげることができる。ここには、一足先も見えない暗闇が広がり、不安や恐怖感がつよくなる場所であるが、「冒険」という未知のものを発見すること（行為）としての環境として、自然による暗闇は、「未知なるもの」をつくりだしてくれる環境といちづけることができる。

*当日発表資料にて、分析対象の詳細資料、参考・引用文献を提示させていただきます。